

これからの時代を生きる子どもたちに何ができるのか

仲嶺 真弓

7月後半…。蟬が一斉にジリジリと鳴き出しました。青い空と白い入道雲のコントラストが映える夏真っ盛りの季節になりました。この季節が来るたびに心に誓うことがあります。絶対に忘れてはいけない、繰り返してはいけない戦争の歴史を心に刻みなおし、平和への思いを胸に折り、願う。

1945年8月6日 午前8時15分 広島に原子爆弾投下

同年8月9日 午前11時2分 長崎に原子爆弾投下

資料によると、広島ではおよそ16万6000人、長崎ではおよそ7万5000人も尊い命を一瞬にして失いました。原爆を投下される以前には、同年3月26日～6月23日 3ヶ月にわたる長い沖縄戦があり、ここ大阪でも3月～8月にかけて8回もの空襲があったことが資料に記されています。その他日本各地でも爆撃はあり、はかり知れない尊い命が失われた末に、1945年8月15日 終戦の日をむかえました。戦争の時代を生きた人々の気持ちに思いを馳せても想像しきれません。けれど戦争があったという事実だけは戦後生まれの私たちもこれからの時代を生きる子どもたちに語り継いでいかなければならないことではないでしょうか。

私事ではありますが、私自身は大阪生まれ、大阪育ちではありますが、ルーツは沖縄にあります。両親は昭和一桁生まれなので2人とも戦争体験者です。両親から聞いた話では、沖縄での戦火を逃れて父方は親族一同、母方は家族で個々に大阪に集団疎開してきました。母は疎開してからも大阪大空襲にあい、命からがら逃げまどったことを話してくれました。真夜中の爆撃は恐怖心でいっぱいなのに、地上から見る爆撃の光景はまるで花火のようで不思議な感覚だったそうです。けれどその直後、自分の真後ろに焼夷弾が落ち、身が縮こまる思いをしたことや、食べるものがなく雑草を見つけてむしって食べていたという話も母から聞きました。父は沖縄から疎開船に乗り込む直後に、爆撃にあい、爆風で足を負傷し片耳の聴力を失いました。けれど、乗るはずだった疎開船は、たくさんの学童が乗っているにも関わらず、本土に辿りつく前に大海で撃沈。父は負傷したことで命は助かったことを話してくれました。生前、父は戦争についての資料やテレビのドキュメンタリーを読みあさり、自分が乗るはずだった船は“対馬丸”だったのではないかと…。 “対馬丸”でなかったとしても、その前後にも爆撃を受け沈没した船があることを知り、脳裏に焼き付いているだろう戦争の記憶を思い出しては考え込んでいました。私はその父の後姿を今でも忘れられずにいます。きっと、忘れてはいけないことなのだと思います。私がいま、生きているのは、戦火の中を生き抜いた父と母がいたから。この命を大事に次の時代を生きる子どもたちに繋いでいきたいと思っています。

私事の話をもう一つすると、私の先祖は終戦後も沖縄には帰らず大阪の住之江の地に根を下ろす道を選択しました。けれど住之江も永住の地にはならず、地下鉄の開発事業など高度成長期の波にのみこまれ、立ち退きを余儀なくされました。親戚は西日本各地ばらばらに転居することになり、私たち家族はこの泉州の地に越してきました。若いころには先祖のことなど知ろうとしなかったけれど、四十路を過ぎたころから、自分の先祖は戦争・戦後の時代をどう生きたのかを知りたい…知っておきたいと思うようになりました。両親の話とこの国に起こった歴史を照らし合わせながら考えると、我が家の歴史も、この国の歴史の流れの一端の上にあることを感じずにはいられませんでした。自分の人生の根底にもこの国の歴史がこんなにも大きく関わっていたことへの驚きと同時に、これからの時代を生きる子どもたちに、大人の私たちは何ができるのか…何を残せるのか…を考え続けていきたいと思っています。

【 7/23 (日) 育む会 根っこの集いに参加して 】

当日は、約70名の参加でした。保護者、OB保護者、子どもOG、外部参加者、職員と、参加した人はそれぞれの立場から見える風景や思うことを発信しあいました。1つの物事でもそれぞれの視点から見えることや感じ方も違うので、「そんな考え方もあったのか…」 「なるほどそう理解すればいいのか」 など、聞いていて自分では考えつかない気づきがありました。いろんな職種や世代の人と話できる機会は、物事を多面的にみることができると感じることをあらためて実感できました。